

時代に足跡を記した大先輩・その5

第一回世界柔道選手権大会優勝

夏井 昇吉 (なつい しょうきち・1925~2006)

昭和18年冶金科卒

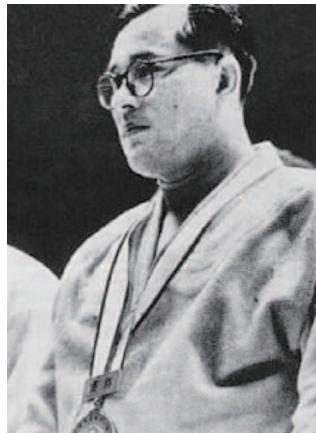
昭和三十一(1956)年、世界柔道連盟が主催し、東京・国技館で開催された第一回世界柔道選手権大会は男子無差別級のみで行われた。優勝者は男鹿市船川港出身の夏井昇吉で初代柔道世界チャンピオンとなった。

夏井は大正十四(1925)年十月十九日の誕生。幼少から体格が良く、運動神経抜群で、評判の腕白だった。地元小学校に入学し、その後、秋田市の秋田工業学校(現秋田工業高校)に進学した。入学早々その体格と運動神経の良さに目を付けたラグビー部から勧誘されて入部、ロックとして活躍した。昭和十八年十二月、太平洋戦争の激化で繰り上げ卒業し地元で小学校教員を務め八ヶ月ほどで徴兵され弘前の野砲連隊に入隊した。翌年の春、東京の機械整備学校に入学を命じられ戦車の構造などを勉強したが、半年ほどで終戦となった。

帰郷して警察官教習所を経て昭和二十一(1946)年五月、秋田県警に入った。警察では柔道か剣道のどちらかをやらなければいけない。夏井は迷わず柔道を選んだ。二十一歳で本格的に柔道を始めて柔道家としてのスタートは遅かったが体格と天性の運動神経に恵まれ、体力も優れて、一年三ヵ月で三段を許された。昭和二十三年の県警察大会で優勝、その翌年は東北管区警察大会で優勝した。その上達の速さから素質を知った上司が、特別推薦してくれて、夏井は二十四年から東京の講道館本部へ柔道留学することになった。

講道館では醍醐敏郎など当時のわが国トップレベルの強豪がいっぱい、当初は彼らに全く歯が立たなかった。それで夏井の負けず嫌いに火が付いた。寸暇を惜しんで熱心に稽古、めきめき力を付け講道館入門の翌年、昭和二十五年には早くも全日本選手権でベスト8。同二十九年には三位、三十年は準優勝した。この上達ぶりに醍醐は驚き、夏井の素質と稽古に打ち込む努力を絶賛している。

柔道を始めてから満十年、昭和三十一(1956)年開催の第一回世界選手権大会に臨んだ。まず代表選考会決勝では兄弟子で強豪の醍醐を決勝で破り日本代表となり、本大会では一回戦3秒、二回戦8秒、三回戦44秒、準決勝戦8秒と、圧倒的な強さで勝ち上がった。決勝でやはり日本代表の全日本選手権を3度制した吉松義彦を下して優勝した。



最初の世界王者となったのである。

ちなみにこの世界選手権第一回大会は男子無差別級のみで、二十一カ国から三十一名が参加した。3位には8年後の東京オリンピックで無差別級金メダルを獲得したオランダのアントン・ヘーシングクが入っている。

大会はその後再三にわたって形式が改革され、男女、体重別などが設定され現在のようになった。

夏井は勢いに乗って翌三十二年は念願の日本選手権優勝をも掌中にした。

それを機に、現役選手を引退。昭和三十五年から三十六年にかけて一年二ヶ月間オーストリアのウィーンなどヨーロッパ11カ国で柔道指導に当たった。

帰國後、警察官としての職務に復帰。秋田県警機動隊長、警視となつて角館警察署長、本部教養課長、横手警察署長の要職を歴任、昭和五十八年に退官した。民間の観光タクシー株式会社に常務取締役として再就職、翌年から二年間は同社代表取締役社長を務めた。

平成四(1992)年に九段に昇段、赤帯を許された。秋田県柔道連盟、東北柔道連盟の各会長、全日本柔道連盟評議員などを勤めた。この間秋田県小学生選手権など地元の大会を開催したほか、全国女子体重別選手権を3年連続で秋田へ招致するなど、地元の柔道発展に尽力した。

現在でも夏井の名を冠した「夏井昇吉旗争奪全県選抜柔道大会」が毎年夏に開催されている。

平成十八(2006)年九月十三日、故郷男鹿市内の病院で呼吸不全のため他界した。八十歳だった。

出典・「あきたタウン情報2015・3月号ふるさと愛 秋田再紀行」

元秋田魁新報常務 杉渕廣氏記事

・ウィキペディア



◆記事

赤川 均 (昭和41年電気科卒)

K.F's Design History



プロダクトプランナー&デザイナー

船木 一美

(昭和48年機械科卒)

P&D_KFworks

プランニング&デザイン_ケーエフ・ワークス

埼玉県新座市野寺5-6-20 〒352-0034

携帯.090-3049-7291

E-mail kf-works@sea.plala.or.jp